

24 惟宗時俊の『続添要穴集』

小曾戸洋・篠原孝市・石野尚吾

鎌倉時代の宮廷医・惟宗時俊（生没年不詳、十三世紀）

惟宗良俊の子。典藥權助・従四位下）は『医家千字文註』（一二九三成）の著者として知られる。またその一族の惟宗具俊には『本草色葉抄』（一二八四成）『医談抄』（成立年不詳）の著があり、これらは数少ない日本中世の医籍として従来注目されてきた。ところで時俊には『続添要穴集』という著作もある。この書は日本現存最古の針灸（灸穴）専門書であり、中世における中国医学文化の受容の実態や、針灸医学の実情をうかがううえで貴重な史料であるが、これまで演者ら以外に本書に言及したものをみない。よってここに本書について報告を行う。

静嘉堂文庫に『続添要穴集』と称する卷子本一軸が所蔵される。本書は山田以文の旧蔵にかかり、明治三十六年に同文庫に入ったものである。奥書き等がないので写

本の経緯はわからないが、近世に古鈔卷子本を臨写したものと思われる。全一二紙。

巻首に「続添要穴集上」と題し、ついで一二行にわたり、次のような時俊の自序がある（原漢文。訓読にあたっては町泉寿郎氏の助言を得た）。

「竊に以く、岐伯、天師と為りて、悉く灸穴の治を顯し、軒黄、雷公に授けて、始めて明堂の名起る。祖述是れ遙かなりと雖も、聖言猶ほ未だ朽ちず。方今、澆季の俗に及び、邪惡の源弥よ深く、暗昧の士に至りては、療を攻むるの道、既に疎し。若し三年艾火の功者に非ざれば、争か五神・蔚氣の患を蠲さんや。爰に旧、『要穴之抄』有り。誰が家の撰なるかを知らず。予、愚管の窺ふ所に任せ、粗、遺漏の闕する所を補ひ、目して『続添要穴集』と曰ひ、分ちて両巻と為す。常に此の書を左右に置き、此の灸を貴賤に施すべし。縦ひ静淵の謀、普く貧野の病を將ひ翼くるに足らずとも、冀くは大慈の懇府に達し、永く余慶を累門に及ぼさんことを。時に正安己亥、無射、甲辰、散位・惟宗朝臣時俊撰す」。以上で第一紙終り。

右の序文から、本書は、撰者不詳の『要穴之抄』を底本にし、時俊が補遺(続添)を加えて『続添要穴集』と改題し、正安元年(一二九二)九月に脱稿したものであることがわかる。

第二紙〜第七紙は総目録である。巻上は「灸風邪第一」から「灸咳嗽喘息第七十」まで、巻下は「灸消渴第七十一」から「灸獺犬所傷第一百七十八」まで(第七十〜第一百七十八は雑病)、一七八の篇目次第が九一行にわたり記されており、全体の構成が判明する。

第八紙以下は本文で、終りの第十二紙までに巻上の第一篇〜第三十篇の記述がある。すなわち、本書はもと全二巻、一七八篇より成るが、現存本文は巻上の前半のみであることが知れる。

本文では旧本亡名氏『要穴之抄』と時俊の続添の文章は明瞭に区別されている。前者原本部には「千金方」「葛氏方」「范汪方」「小品方」「新録方」「集(集験方か?)」「華他方」「耆婆方」「耆婆針灸図」「秦承祖図」「九虚経」「明堂経」「明堂灸経」「刪繁論」などの書からの引用がある。これらは唐鈔卷子本に由来するものであり、『医心方』

の引用と少からず一致するから、『医心方』からの援用の可能性も高い。

これに対し、時俊の続添部では「聖恵方」「外台秘要方(現伝本に当該文見えず。『本事方』からの援引か。上田善信氏説)」「王惟一」「備急要方(『千金要方』とは別書か)」「千金翼方」など、すべて宋刊本に拠ると考えられる医書からの引用で成っている。

以上の事実はこの時期(十三世紀後半)、医学典範が旧唐鈔卷子本から、新渡来宋刊本に移行しつつあったことを如実に示すものである。惟宗時俊・具俊らはそれを担った当時の最先端の医学者であった。やがてそれは禅宗僧医の手に移っていく。惟宗氏の著述はその過程をよく教えてくれる。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)